

# 栄光

説教

## 『神のまことの恵み』

イザヤ書35章1節～10節  
ペトロの手紙一5章12節～14節

岸 俊彦

説教・ 「神のまことの恵み」 岸牧師……………1
特集・ 『栄光』800号記念 ……………2
CS教師就任……………6
伝道師の書き込み……………7
牧師の書斎から……………7
長老のファイル……………8

7月11日に発行する『栄光』800号

の編集をしています。寄稿してくださった方は、『栄光』の歴史と自分の歴史を重ねて、「それぞれの人生に神の備えあり」「人と人との出会いがあり」と書いてくださっています。「父である神があらかじめ立てられた御計画」（1ペトロ1：2）に基づいて、それぞれの人生があります。思いがけない信仰の広がりがあります。

ペトロは手紙の結びでシルワノとマルコの名を挙げています。

この手紙は、「忠実な（信仰の）兄弟」シルワノが口述筆記しました。彼はパウロの同労者です（1テサロニケ1：1）。使徒言行録ではシラスと呼ばれています（15：22）。シラスがユダヤ人としての名で、シルワノはそのラテン名です。

彼はエルサレム教会の指導者でした。シリアのアンテオキア教会の指導者がパウロとバルナバでした。両教会を結びつけたのがシルワノです。やがてエルサレム教会を離れ、パウロの第2伝道旅行の協力者となります。2人でギリシヤ世界の伝道に取り組みました。

マルコはペトロの通訳だったと伝えられます。ガリラヤ湖の漁師だったペトロは、異邦人伝道のためにギリシヤ語の通訳を必要としました。彼はペトロの異邦人伝道の同労者となりました。もともと彼の母マリアはエルサレム教会を支える1人でした（使徒12：11、12）。バルナバの従兄弟でもありました。マルコとパウロとの対立がバルナバとパウロとの対立ともなりました（使徒15：37、38）。それ

がパウロの第2伝道旅行のきっかけとなるのですから不思議です。マルコについてより重要なことは、彼がマルコによる福音書を書いたと伝えられていることです。この福音書によってキリストの生涯がつまびらかになりました。マタイ、ルカ、もしかしたらヨハネも、マルコによる福音書を下敷きにそれぞれの福音書を書きました。

教会同士に対立があり、教会の中に対立があり、また使徒の間で、弟子たちの間で、教会員の間で対立がありました。さらには世の中と教会の対立、教会に対する迫害がありました。それにもかかわらず、思いがけない信仰の広がりがありました。神が予め定めてくださったご計画です。私たちからは測り知ることのできない神の備えがあるのです（ローマ11：33）。

この手紙の結びには「共に選ばれてバビロンにいる人々」も登場します（5：13）。バビロンとはローマのことです。聖霊降臨によって最初の教会であるエルサレム教会が立てられてから、60、70年で、キリストの福音はローマ帝国の都にも伝えられ、信仰の兄弟姉

妹の交わりが広がっていました。万物の終わりは迫っています。目を覚ましてしらふで神の必然のご計画とその御業を見なければなりません。目に見えないものに目を注ぐのです。復活のキリストの証人として、私たちは最後まで耐え忍ぶのです。礼拝を止めてはなりません。祈ることを止めてはなりません。賛美し続けるのです。御言葉に聞き従い続けるのです。大胆に御言葉を語り続けるのです（使徒4：29）。

ペトロは「愛の口づけによって互いに挨拶を交わしなさい」（5：14）と勧めます。この「愛」について、ペトロは「これこそ神のまことの恵み」と証しました。「この恵みにしつかりととどまりなさい」と勧めました。信仰の広がりを生む「キリストによる恵みと平和」です。ペトロもシルワノもマルコも、ローマの人々も、そしてパウロも、想像もしなかった信仰の広がりの中にいます。キリストの十字架の死と復活によって示された私たちの救いの計画、罪と死からの救いのおかげです（ローマ4：25以下）。

# 『栄光』 800号記念



この数字は何かを達成した記録ではなく、  
通過点の1つです。

休刊することなく、発行し続けて来られたのは  
いつも神様が共にいてくださったから。

そして、皆さんからの原稿があったからです。

『栄光』は皆さんにとってどのような冊子ですか？

また、皆さんにはどんな人生の通過点がありましたか？

## 私のターニングポイント

大澤秀夫

昨年の春、牧師を隠退し、松本に戻りました。引越し作業をしていて『栄光』のファイルを見つけてきました。私が経堂北教会に伝道師として赴任した1976年春から、百合丘の開拓伝道が始まった1979年まで4年間分の『栄光』でした。1976年5月号(263号)には私の就任の挨拶「堅固な素直さ」が、7月号(265号)には「神の作品」という最初の説教が掲載されています。

今回、「あなたにはどんな人生の通過点がありましたか？」との質問をいただき、経堂北教会が私にとっての大きな通過点であったことに気づきました。経堂北教会は最初の任地ですし、更に百合丘伝道所時代を合わせると16年間を過ごしました。経堂北教会は単なる通過点ではなく、その後の私の牧師としての養いの場所、苗床であり、その経験が私の牧師として

の歩みを決定づけました。

そう考えると、どうして他の教会でなく、経堂北教会だったのか、と不思議な気持ちにもなります。更に、そもそもキリスト教とはまったく縁のなかつた私が、どうして教会に行くようになったのか、いったんは会社に勤めた私がどうして神学校に行くようになったのか、全部が不思議なことにも思われてきます。

ですから、話は逆であるのかも知れません。私たちは自分の人生を、私がいろいろな場所を通過して行く、というようにイメージしがちです。しかし、そうではなく逆に、誰かが私を通過して行く。そのことによって私たちの人生が転換し、新しい世界へと導かれていく、それが人の生涯なのです。実際、私自身の生涯を振り返ると、そのことが小学6年生のクリスマスに起こりました。お菓子をもらいに行つた私が、その次の日曜日から毎週、日曜学校に通うようになりました。あの時、主イエスが私を通過されたに違いありません。私こそが、イエスさまの通過点だったのです。

## 『栄光』のプレゼント

栗平教会牧師  
高橋圭子

「月末に レタ・パ（レターパ  
ック）を開く、ワクワク感！」  
これは、『栄光』誌の執筆・編集・  
印刷・製本・発送に関わるすべて  
の方々への感謝の五七五です。

15年前、奈良県の御所教会から  
栗平に遣わされた当初、私は西部  
連合長老会への愛着が強すぎたの  
か、神奈川県連合長老会の牧師会に  
はなじめず、栗平教会の長老会と  
も関係がこじれたままでした。

結果、7月予定の就任式は9月  
に延期。転出者も続出の事態に、  
かなりへこんでいました。「…とい  
うわけで恐縮ですが『栄光』、送  
付部数を減らしてくださいませか  
？」と岸牧師にお願いをしました。  
先生からは「カタオカ」（私の  
旧姓）、お前って、ホントに評判  
悪すぎだぞ〜と30年前の「もよ  
り牧師会」でしばしば「冗談」で  
言われたお小言を今度は「マジ」  
で頂戴する羽目になるのか、と

戦々兢兢々でした。愚かな私！

岸牧師は、「そっか…大変だな。  
でも教会は神のもの。いい時も悪  
い時もある。キリストが救いであ  
ることは変わりないし…」と、  
力強く慰めてくださったのです。

心にすんと落ちる言葉でし  
た。頑なな自分から一歩外に押し  
出されたような気がしました。『栄  
光』が与えてくれた牧会者の言葉  
は、今でも私の支えです。

さて、『栄光』は2面〜4面の「特  
集記事」でも輝いているな、毎回  
気合が入っている編集だな、と思  
います。時に、「神中心からずれ  
てない？」と超保守的な私はちょ  
つとの間フリーズ（笑）します。が、  
別の声が「だから何なの？ キリ  
ストの救いは変わらんでしょ！」  
と応える。一人信仰問答状態（暇  
か！）

私事ですが数年前からは、巻頭  
説教を読むのが特別な喜びになり  
ました。経堂北教会の中に新しい  
家族が与えられたからかもしれま  
せん。（今は広島で、オンライン  
礼拝らしいが）彼らの聴く御言葉  
の説教を、『栄光』は私にもプレ  
ゼントしてくれています。

## 信仰のひろがり感謝

久野真理子

『栄光』の原稿依頼をいただい  
て、半世紀前になるでしょうか、  
亡くなった父が『栄光』の原稿  
を頼まれた」と真剣に机に向かっ  
ていた姿を懐かしく思い出します。

青年会時代に私は良き牧師や個  
性的な友との聖書研究やワークキ  
ャンプ、修養会、日曜学校奉仕な  
ど、恵まれた学びと交わりを豊か  
に与えられました。それは卒業し  
た恵泉女学園と共に、キリストに  
基をおいた人生の旅の始まりを確  
かにするかけがえない時でした。

1975年、日本キリスト教会  
犬塚教会の久野牧（のぞむ）牧師  
と結婚しました。教会は福岡県筑  
後平野にあり、究極の農村です。  
「村八分になることを覚悟でキリ  
ストさんにお世話になることを決  
心した」という養鶏業の方や「福  
音堂」電器店のご夫妻は筋金入り  
の信仰者でした。

1982年、徳島教会へ。保守

的な土地柄です。そのような社会  
で、深い聖書理解と愛とユーモア  
あふれる教会員には励まされまし  
た。また、同和地区の友らの差別  
される側の怒りと悲しみをつぶさ  
に見聞きし、「一人一人の存在の重  
さ」を知らされたことは私にとっ  
て決定的なことになっています。

1991年、札幌北一条教会へ。  
長老の奨励などで専門性の高いお  
話を聞くことができました。

2006年、函館相生教会へ。  
温かくおおらかで真直ぐな信仰の  
教会員と共に様々な取り組みがで  
きました。東日本大震災被災地で  
のボランティア、「バルメン宣言」  
「原発」「LGBTQ」などの勉強  
会、講演会で多くを学びました。

2020年、78歳で久野が牧師  
を引退し、現在は佐賀めぐみ教会  
で応援牧師として仕えています。

長いこと、地方の教会にいた私  
にとりまして、『栄光』からの情  
報は刺激的です。自分が見えなく  
なっていたこと、見落としてしま  
うことを教えてくれるものでもあり  
ました。また世界の様々な地で信  
仰に生きる兄弟姉妹たちの生き方  
は新鮮なものがあります。感謝。

## ついでに

前田佳子

思い掛けず、『栄光』800記念号への原稿依頼をいただき戸惑いましたが、光栄なこと、また心待ちにして毎号恵贈いただくこと嬉しく、拙稿のペンを執りました。

2020年は私の受洗60年、還暦の歳でした。1960年クリスマス現在籍の日野台教会で藤本陽一先生より洗礼を授けられました。その時同行した夫は初めて礼拝に参加したようです。それ以後、私は共に教会生活することを願っていました。熱心な仏教徒で菩提寺の総代を務める家で育ち、仏教的宗教観でしたので、無理なことだと思いつつも「求めよさらば与えられん」(マタイ7・7)を信じて60年間祈り続けました。この幾年かは情性のようでしたが、神様は人知を超えた不思議な業をされることを実感しています。歎びも悲しみも慰めもいただくのですね。それにも時があることを知

りました。コヘレトの言葉3章「天の下の出来事にはすべて定められた時がある」(3・1)を思い出します。

昨年からは生活が大きく変わりますが、私の身上にも劇的な事が起りました。長女が脳幹出血の折に、延命を一番願った夫が自宅で転倒し、手術の後は顔面帯状疱疹、三叉神経痛に苦しみ、面会も出来ない入院生活が4ヶ月続きました。人が変わったようになって次の施設へ行く前に一度帰宅が許されました。在宅1週間内1日だけ目も開け意識もはっきりする時があり、私に教会行きを促しました。キリスト者として地上の生活は出来なくても永遠の生命(いのち)を信じて、一目散に日野台教会向って走りました。先生は「可能なら今から病床洗礼式を」と仰り、夫の枕元で使徒信条を音読し式に臨みました。〃とこしえのいのち〃を信じて。稲田牧師、役員の方にはつきりと「信じます」と返事をしてその3日後召天致しました。『栄光』3月号の岸先生の文章に「天国行き」をより確実にするために受洗を」と拝読し、慰めをいただきました。

## 忘れ得ない日々

永井清陽

ひよつとした偶然が、人生を支配した、という話を聞いたり、読むことがある。私も、太平洋戦争(第2次世界大戦)では、危うく2度、命を落としそうになった。

1936年、名古屋で生まれた私は、小学2年まで名古屋で過ごし、幼稚園は、近くの聖マリア幼稚園に通った。後年、読売新聞・ローマ支局当時、来客があれば、必ず、日曜は、バチカンに連れて案内した。広場を埋め尽くした市民・外国人に向かつて、ローマ法王が、何度となく居室の窓を開けて手を振り、大群衆がどよめくからである。

バチカン広場で、私の通った幼稚園の先生と同じ服装のシスターを多数見つけ、支局助手のアメリカ人女性に、「僕はこの派の幼稚園に通ったんだ」という話をしたら、「随分、古めかしい派ね。別のキリスト教幼稚園は、なかった

の」と一蹴されてしまった。小学3年。学童疎開が始まり、私は、「縁故疎開」ということで、母の故郷・愛知県岡崎市の祖父・叔父・叔母に預けられた。学校は、歩いて30分。麦畑を抜けて山の腹にあった。

1945年(昭和20)3月。名古屋の両親が戦災で家を失い、私は、岡崎市で親子3人、新たな生活を始めた。4年時の小学校も、小さな山の山頂にあり、歩いて30分。当時の地方の小学校としては、珍しい鉄筋コンクリート造りで、今は、愛知学芸大学の校舎となった。だが、45年4月からの、この校舎での授業は、思い出せない。というのも、殆ど授業がなかったからであり、明確に記憶にあるのは、4月から敗戦8月までの4ヵ月間に、私たち親子は、2度、空襲に遭遇したことだった。

1度目は、親子3人で住んだ借家が焼夷弾で丸焼けになった。2度目は、父親と離れ離れになり、母親と2人で、防空壕に溜まった泥水を一晚中すすり飲み、どうにか命を支えることが出来た、ということだった。

## 傘寿（満80歳）を生きて

杉本正和

今年で教会生活62年になります。「若い日に創造主なる神を覚えよ」と入学式で学長のメッセージに感化を受け、同時にチャペルサービ

スで男声合唱の讚美歌に魅せられました。1961年、東京で社会人になって、1972年春に経堂に転居。翌日、家族6人で近所を散歩している時に教会を見つけた。経堂北教会です。次の日曜日から家族全員の教会生活が始まりました。家内は1年間、神学校の夜学コースに通い、翌年に受洗。夫婦で教会学校の教師陣に加わりました。教会ファースト、聖歌隊ファーストの人生です。神様を中心とした教会生活、毎週の礼拝で牧師の宣教、聖書のみ言葉を聞き、信徒の交わりがどんなに恵まれている事か、楽しかった思い出しか残っていません。長老会、百合ヶ丘への開拓伝道、教会学校、1泊修養会、家庭集会、教会音楽祭、

聖歌隊の奉仕など。教会の機関紙である『栄光』に教友の皆さんの記事がその事を物語っています。

世の中、只今パンデミックの最中にあります。私は去年の秋から1年足らずで9人の親友の訃報を受けました。今月で83歳になります。70代には無かった経験ですが、中でも今年になって近くの住宅で3人の方が天国に旅立ちました。コロナ禍で病院のお見舞は出来ず、不本意な別れです。親族であれば悲しさ、辛さはひとしおです。振り返って私は戦争で両親、妹を失いました。家内も11年前に事故で召天しました。爾来、天国は身近になりました。それでも亡くなる人との別れは悲しい。涙が一杯出ます。「神様、明日の命を守って下さい。助けて下さい」の願い事、叫びが叶わず、その人の存在が消える事ほど、打ちのめされる事はない。どこまでも神様に鍛えられる人生なのだ。80代になって「生きるのではなく、生かされているのだ、神様の恵みの中にあるのだ」と気付くには時間が掛かる事なのか、信仰の道はいつまでも続きます。

## 『栄光』と共に歩む

沢田寛子

若い頃は『栄光』を持って帰ってきて、目を通して、そのままどこかに置いたままになっていま

した。私にとってこの冊子は教会が発行する印刷物の一つ、という位置づけでした。でも自分が編集に携わるようになり、委員長になってからは、年ごとにファイリングをするようになりました。教会総会資料を書く時に「すぐに探し出して便利」という理由からでした。でも父は違っていました。「これを寛子の会社関係でお願い出来ないか」と、あるとき『栄光』20年分の合本を頼まれました。ずっと取ってあっただけではなく、これからも大事に残しておきたい、という父の思いが伝わってきました。合本を渡したとき、大切そうに抱えていた父の嬉しそうな顔が忘れられません。それ以来、自分にとってもこの冊子の見方（見え方）が変わったように思います。

800号続いている冊子がどれだけあるかは正直分かりません。毎月執筆依頼をしてくださる岸先生、そして書いてくださる方がいるから続いている、奇跡のような一冊だと思っています。冒頭の説教から個人消息まで、丸ごと一冊が経堂北教会史でもあり、教会員の個人史でもあります。

毎月校正作業を行い、多少手を入れることもあります。しかし文体の「その人らしさ」は大事にしよう、とみんな話しています。文章を書き慣れている人も、そうではない人もいます。でも文字を通して、その方が見えて毎月の原稿がとても楽しみです。こちらは勝手に？テーマを決めてお願いしていますが「何を書いていいのかわからないけれど、この機会に考えてみることにしました」と文章を書きはじめてくださる方もいます。そしていただいた原稿を読んだ時、そこにはたくさん「喜び・祈り・感謝」があることに気がかされます。父が亡くなって今年でちょうど10年。この800号は天国の父とも喜びを分かち合いたいと思います。



『栄光』第1号誌面

## データから振り返る『栄光』800号

『栄光』第1号は1953年7月、伝道文書を目的に発行されました。その年の4月伝道師に就任した十時英二先生が編集責任者で、3段組ガリ版刷り、6ページでした。1ページ目は村田正亮牧師の宣教「聖なる苦痛」（マルコ14・32〜42）でした。

誌名の由来について十時先生が記しています。「実は私自身は最初あまり気乗りしなかったのです。これから出そうとする月報に『栄光』の名は些か重すぎると思えたからです。けれどもよくよく考えた末、神の栄光は私たちの最も卑しいところに顕されると思つてそう決定しました」（1996年7月50号）。

## (教師)

四竈 揚牧師 978回  
岸 俊彦牧師 779回  
大澤秀夫牧師 186回  
村田正亮牧師 157回  
上野峻一牧師 53回  
久保哲哉牧師 51回  
田邊優子牧師 51回  
片岡宝子牧師 48回  
鈴木賛美牧師 44回  
狩野進之佑伝道師 44回

## (信徒・敬称略)

永井清陽 86回  
宇田川潔 82回  
沢田寛子 76回  
尾藤美紗子 61回  
杉本正和 56回  
田中 暁 53回  
有賀四郎 53回  
江幡園子 46回  
大西 順子 42回  
志磨恭子 41回

1970年1月195号からタイプ印刷、1993年2月460号からオフセット印刷、2014年4月73号からレイアウト、印刷、丁合と全て教会で制作するようになりました。パソコンと印刷機の進歩のおかげです。何よりもプロの編集者がいたからです。毎月最終日曜日は礼拝後編集委員会、その後印刷、月曜日に丁合、第1日曜日までには発行されます。その後、問安委員会が郵送します。執筆者は1793人、延べ9801人です。執筆回数は次の通り。

(岸 俊彦)

## CS教師就任

## 全部使って伝える

菊地信行

教会学校に来る子どもたちを見ると、かつて自分が通っていた時のことを思い出します。小さい頃はただ両親に連れられるままに礼拝と分級に出ていました。この原稿を書いている今でもすぐに思い出されることは、分級の外遊びや、礼拝堂を探検したこと、夏のキャンプや降誕劇の思い出など楽しいものばかりです。

しかし、そうした思い出の中にいるのは歳の近い子どもたちだけではありません。私の記憶の中に強く印象に残っているのは、CS教師をしていた大学生ぐらいのお兄さんお姉さんの姿です。幼い私にとって彼らは憧れの存在でした。少しでも憧れの人たちと同じになりたくて、「主の祈り」を覚えてたり、讃美歌を大きな声で歌ってみたり、説教を聞いているふりをしていました。そうすれば決まって嬉しそうに笑ってくれるからです。お世辞にも立派とは言えな

い動機でしたが、CSから始まった私の教会生活はやがて受洗へと導かれ、ついには献身の志まで与えられました。

これは私自身の経験でもありませんが、よく言われるのは、大人たちが考えているよりも、子どもたちは大人のことをよく見ている、ということだと思います。CS奉仕のことを考えるとすぐに思いつくのは子どもたちへの説教でしょう。しかし子どもたちを見る度に、伝道とはそれだけではないことが思い起こされます。私が見てきたのは、心から教会生活を楽しんでいる青年たちでした。教会において説教以上に大切な業はありません。けれども、子どもたちは、私たちが語る言葉に自分たち自身がどれほど養われているのかをよく見えています。ですから、私たちが御言葉に支えられ、また恵みを受けている姿も証しになるのです。私たちの口を通して語られる言葉と振る舞いが伝道になり得ることをいつも心に留めながら、CS教師としての働きに励んでまいりたいと思います。

## 伝道師の書き込み

緊急事態宣言は解除されましたが、相も変わらず家にこもりきりの生活をしています。正教師試験関係で、何度か出かけたくらいのものです。6月の間に教区との面接が終わり、皆さんに協力していただき、二度ほど説教で取り扱わせていただいた正教師試験の課題についても、とりあえずの提出が終わりました。

課題は採点されて、基準に満た

## 牧師の書斎から



このところ毎日のようにオンライン会議です。時間の調整がしやすい、往復の時間も必要ない、交通費もかからない、と便利は便利ですから、多いときは1日3回会議が続きます。原則1人の発言が終わってから次の人の発言、と横やりを入れたり冗談を言ったりはできません。誰かの発言中、ちょっと隣の人とおしゃべりとはいきません。資料は事前に手元にある

ない場合は書き直しの提出が求められます。補教師試験の際も同様

でした。補教師試験の際は、私の課題を採点した方がおらかな人だったのか、幸運にも書き直しなしで通過できました。書き直しを求められた人の中には、私よりもずっと優秀な人もいましたので、かなり戦々恐々としながら過ごした覚えがあります。いつまで経っても書き直しの課題が届かないので、気がつかないうちに、うっかりいらぬ紙ゴミと一緒に捨ててしまったのではないかと不安に駆

し、画面上にも出ます。それでもどこを説明しているのか分からなくなる場合があります。しかし隣の人に教えてもらうわけにはいきません。他の出席者もいるのに1人で「すみません、どこのページですか」とは言い出せません。画面を見ながら、イヤフォン、マイクを身につけて会議に参加するのは慣れましたが、さすがに疲れます。出席者が多ければ、画面に全員の顔がいつも出ているわけではありません。画面が消えたり、なぜか音声途切れたり、自分

られたものです。

今回は説教課題以外に二つ課題が出ていたのですが、恥ずかしながらそちらの出来が説教以上によろしくありません。そういうわけで、今回はおそらく間違いなく書き直しを食らうでしょう。課題がやっつけないことを不安に思う必要はなさそうですが、その分、今年には紙ゴミを出すときには、いっそうの注意が必要になりそうです。正教師試験の課題関係は9月頃まで続きますが、なんとか首の皮一枚でも繋げて乗り越えていき

が悪いのか、相手が悪いのか、パソコンの調子が悪いのか、回線が悪いのか、よく分からないままバタバタしてしまいます。

危篤の方を見舞ったとき、病室に入ることは出来ず、画面越しで聖書を読み、祈りました。オンラインで繋がっているのですが、聖霊がつかないでくださると信じて祈りました。1枚の大きなビニールシート越しに話しかけ、祈ったこともあります。直接手を触れたりすることはできません。車椅子に座る相手は、顔はもちろん、全身

たいところです。

話は変わって教会学校のことです。月報の長老会報告などでも伝わると思いますが、夏期学校とキヤブは残念ながら今年も中止ということになりました。蔓延防止等重点措置が出てい中でもありますので致し方ないことでありますけれども……。ともかく今年も『CSだより』の夏休み号が拡充される予定です。いつも通り掲示板に張り出すと思いますので、子どもたちのために祈りいただけたいです。(狩野進之佑)

目の前にいるのですが…。面会時間も予約して15分と限られています。それだけに、その方を覚えて1人祈ることの大切さを感じさせられています。

オンライン会議の出席者が、「それまで毎週礼拝に出席していたのに、この1年1度も出席していない」と話しました。たまたま仕事先に教会があり、そこでは礼拝をしていたそうです。連絡し出席を許され、聖餐に与ることができたそうです。その感動がオンラインを越えて伝わってきました。(岸)

## 個人消息



## 長老のファイル



新年度がスタートして2ヶ月、コロナ禍の中でも礼拝を守り続けられていること、行事計画が柔軟な対応をしながら、具体的に決められつつあることに感謝です。

「教会夏の集い」では種房正勝・惇子牧師夫妻がご奉仕くださいました。ご夫妻は1988年から18年間経堂北教会に在籍されました。その後、上野教会で牧会されるに至るまでのお二人の歩み、神様の

お導き、伝道への篤い思いなどのお話を伺うこと、再会がとても楽しみです。実り多き良き時となりますように。

『栄光』800号。積み重ねの重み、大切さを感じます。そこには教会の歴史とともに、教会に集った方々の信仰の、人生の一端があるのです。原稿を書くことは苦行ですが、それぞれのお人柄を表す文章を読むのは毎月楽しみです。そして昔の『栄光』を再読し、それぞれの証し、歩みに新たに心動かされる私です。

## 掲示板



## ○教会夏の集い

7月11日(日) 10:15~13:00

説教「共に祈ろう、信仰があなたを救う」  
サムエル下24:1~17、ルカ5:17~26  
種房正勝牧師(上野教会)

講演「律法主義がもたらすもの-旧約時代の律法と新約時代の律法完成を通して-」  
マタイ5:3~12  
種房惇子牧師(上野教会)

## 編集後記



▽『栄光』の原稿を初めて書いたのは31年前。記念すべき800号に携わることができて感謝です。皆さま、これからも宜しくお願いします。(酒井)

狩野伝道師は正教師試験に、菊地神学生は補教師試験に臨む今年。オンライン面接で、レポートでの試験になるとのこと。お二人が主の福音伝道のために祝され守られ、召命感をもって導かれ、無事に合格されますようにと祈ります。

教会員の間でもワクチン接種をされた方が増えてきています。オンラインピック開催、変異種など、まだまだ心配な要素はありますが、少しでも安心して過ごせるようになりそうです。自分を、そして

お互いを守るために続けてきた自粛生活です。もうしばらく頑張ってくださいませよう。大切な人たちと気兼ねなく集い、喜びを分かち合うことが出来る時まで主のお守りを信じ、励ましあつて。

「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。それは朝ごとに新たに」(哀歌3:22,23)。(小嶋幸子)

「栄光」2021年7月号  
日本基督教団 経堂北教会  
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11  
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038  
牧師：岸 俊彦 伝道師：狩野進之佑  
編集：栄光編集委員会  
Email：kyodon@nifty.com  
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp